

〈夕紀の今月の一句〉

捕虫網白きは月日過ぎやすし

宮坂 静生

使い始めの白い捕虫網がある。これも次第に色がくすんで白ではなくなっていくだろう。月日は過ぎ易いものだから。捕虫網を持っている少年も、みるみる成長して青年になり、大人になって行く。月日をもたらすものを、捕虫網が語りかけてくれる作品である。

(第五句集『春の鹿』所収 四十八歳作)

〈夕紀の今月の一句〉

濁りこそ川のちからや白緋

宮坂 静生

底や岸の土を浚って流れて行く激しさこそが、川
力なのだというのだ。若々しい思いがあふれる句であ
る。作者は、地元信州の激しく流れ下る川を見て、激
動の人生を思い描いたのだろうか。この句の中には川
を眺めている白緋を着た人が立っている。これは作者
の投影だろう。白緋という季語があるため、純粹な景
色の句というより、作者の心の風景とも受け取れる。

〔『春の鹿』昭和六十二年作。五十歳〕

〈夕紀の今月の一句〉

遠目には闇あるばかり涅槃像

宇佐美魚目

暗いお堂の中に涅槃像が置かれている。けれど少し離れたお堂の入り口からは、暗いばかりで何も見えな
いというのだ。お堂に入り目が暗さに慣れると、そこ
には立派な涅槃像が横たわっていたのだ。お堂の暗さ
が神秘性、荘嚴さを漂わせる。闇の中からうつすらと
見えてきた涅槃像は、まさに信心の光明を思わせるよ
うな現れ方だったことだろう。見えないものを描きた
いと語っていた魚目の、それを果たした一句だろうと
思う。五十四歳の作。魚目が尖っていた頃の作品である。

（第四句集『紅爐抄』昭和六十年刊）

〈夕紀の今月の一句〉

開きたるままの本ありけふ冬至

宇佐美魚目

画集だろうか。分厚い辞典だろうか。いつまでも片づけずに開いたまま、調べものの途中なのである。求めているものの答えがまだ出ていないのだろうか。すでに冬至となつてしまった。今年もわずか。老人になつた身には一日が短い。

魚目の住んでいた鳴海町には、魚目の死後も至る所で魚目の字に出会うことができる。寺の扁額が魚目の字だったり、レストランのガラスケースに魚目の短冊が飾つてあつたりするのだ。習字の弟子、俳句の弟子というわけではない。頼まれれば気楽に書いたのだろうか。冬至の句の二句前に「問ふ人にややあり答ふ息白し」があるが、きつとこの句の時もノーとは言えないかつたに違いない。

(『松下童子』平成十四年作)

〈夕紀の今月の一句〉

秋燕のしばらくは人見て飛び

宇佐美魚目

春に来た燕は秋になると南方へ帰ってゆくが、軒に巣を作る親しみのある鳥である。この燕もそろそろ日本を離れる頃、営巢した付近を飛び回っているのだ。時に商店街などを低く飛び回っているものは、人の生活の中に入り込んでいるようにも見えるものだが、この燕も数か月間世話になった家や人を懐かしそうに眺めながら飛んでいるようだ。別れを惜しんでいるように見える燕に、心を合わせている老人になった魚目がいる。

〔松下童子〕平成十四年作

〈夕紀の今月の一句〉

迫真の似顔絵おそれ夏の闇

宇佐美魚目

魚目が私淑していた香月泰男の「舟上」という絵は、小舟に狭しと坐っている男が黒一色で四人描かれていて、みな瘦躯長身で、それぞれ首を少しずつ違う方向へ傾げている。この絵のモデルは魚目だそう。確かに一番左の目を伏せた人物は魚目によく似ている。しかし、後の三人は丸い白目がまるで亡霊のようで、手を合わせ祈っているようにも見える。闇に浮かび上がる人物の生前と死後の変化が描かれているような、まさに迫真に迫る絵なのである。

〔松下童子〕平成十二年作

〈夕紀の今月の一句〉

川舟をめをとに繋ぎ木の葉雨

宇佐美魚目

木の葉雨とは、木の葉がとめどもなく降る様を雨に喩えた冬の季語である。魚目は冬の句を得意とする俳人であった。吟行地として木曾川、揖斐川、長良川などが思い浮かぶが、この川舟は船大工が板を曲げて作った細長の舟である。川岸に打ち込んだ金属製の環かんに紐を括かって、舟を結むすわえるのであるが、一環に二艘ふたふね繋いだものを「めをとに繋ぎ」と洒落て述べたのである。その舟へ木の葉が降り注いでいるしっとりした風合いの句である。

（平成三年作、第六句集『薪水』所収）

〈夕紀の今月の一句〉

応答はきりりころろと初かはづ

宇佐美魚目

指月会という吟行会に、私が参加して数か月たった頃の魚目作品である。名古屋の仲間たちの中で、東京の下町出身は私ひとり。私の話し方はきはきはきしている。と魚目先生が面白がった。確かに私は名古屋や関西出身の人達とは違って、はつきりした物言いをしていたようだ。

その私を詠ったのがこの句で、蛙にされてしまった。しかも吟行句である。初が付いたのはまだ珍しさが残っていたからだろうか。

〔『松下童子』平成十一年作〕

〈夕紀の今月の一句〉

凍蝶のおしろいの顔夢に入り

宇佐美魚目

蝶に「おしろいの顔」というのが驚かされる。蝶の鱗粉は羽の粉で雨の日にも飛べ、外敵から逃げるにも役立つものだが、顔にも粉があるのだろうか。

「雪兎きぬずれを世にのこしたる」「富士額春の夕べを奈良にをり」「寒さむといふ柳の眉の消ゆほどに」「湖に火蛾抛つて女など」等『紅爐抄』には恋と思わせる句が幾つかある。どれも雅で、日本の古いタイプの美しい女性像が浮かぶ。そう読んでくると、この句の蝶も女性の比喩だろうか。失ってしまった恋の相手か、ほのかに恋心を寄せている人か。突然脂粉の人の顔が夢に浮かんで目が覚めたというのだから。魚目五十六歳の作品である。

(第四句集『紅爐抄』より)

〈夕紀の今月の一句〉

つつましきかたち暗きに火消壺

宇佐美魚目

火鉢を使っていたころ、火のついた炭を片付けるのに使ったのが火消壺である。この壺に入れることによって、空気が遮断され炭の火が消えた。暗い廊下の隅に目立たないように置かれていたに違いない。どこの家庭にもあった火消壺だが、日本家屋の中でもっともつつましやかに置かれていた、その奥床しい佇まいに魚目は美を発見している。

〔『薪水』平成元年暮の作。魚目六十三歳。〕

〈夕紀の今月の一句〉

早紅葉やなみだに揺れて山と空

宇佐美魚目

早紅葉は初紅葉のことか。他の木に先駆けて紅葉している葉のことだろう。理由はわからないが、作者の目には涙が溜まってきている。今まではつきり見えていた山が、空との識別さえも危うくなっている。悲しい涙か、悔しい涙か、或いは嬉しい涙か作者は明かしていない。しかし、澄んだ調べは、一人静かに涙していることだけを伝えたいようだ。

（第四句集『紅爐抄』より。昭和五十七年作。五十六歳）

〈夕紀の今月の一句〉

巢をあるく蜂のあしおと秋の昼

宇佐美魚目

見えないものを描きたい、とよく言っていた魚目にこんな句がある。これは聞こえそうもない音をさも聞こえたように描いている。前書があり、「木曾 灰沢 三句」、その真ん中の句である。他の二句は、「紙魚のこゑ聞きしや山の湯に二日」「蜂の巢やねむりて指のひらきたる」である。とすると、読んでいたのは中国の奇譚で、夢の中で、蜂の国に迷い込んだのではないか。この句、蜂が作者と同じサイズに感じる。小さくなった魚目に蜂の兵隊が近づいて来る足音だろうか。「秋の昼」という季語が静謐を導き出している。

この句は魚目の代表句の一句で、人気作である。昭和五十八年五十七歳の作、『草心』所収。

〈夕紀の今月の一句〉

熱湯は連珠のごとし山霞む

宇佐美魚目

春浅い山が見える部屋の炉か、或いはストーブだろうか、火にのっている大薬缶から大きな急須へたっぷりと熱湯を入れる。その湯が玉を繋ぎ合わせた連珠のように見えるというのである。作者は流れ落ちる熱湯を凝視している。魚目は多分お茶を振舞われた方だろう。一連の気取りのない動作を眺めているのだ。周りの山々は霞がかかり、まだ寒さが残っていたことだろう。

昭和四十九年作、魚目四十八歳。『秋収冬蔵』所収

〈夕紀の今月の一句〉

雪吊や旅信を書くに水二滴

宇佐美魚目

魚目は書道教授を生業にしていた。子供の頃から習字は得意で、子供ながら自分のやり方で練習し師を驚かせたらしい。そのやり方というのは、じっくりと手本を眺め、得心がいった時点で筆を持ち、一気に書くというもので、書いた半紙を手本と合わせると、ぴたっと手本の字と魚目の字が重なったというのだ。だから時間はそれなりにかかるが、半紙は二枚しか使わなかったらしい。

掲句は雪国の旅だろうか。携帯用の小さな硯に水滴から水を二滴落として墨をする。はがきを書くにはこれで充分足りるのである。外は雪景色。いつものように筆を進める。

『『天地存問』昭和五十一年五十歳の作』

〈夕紀の今月の一句〉

たくあんをいたくも喰ひし獵夫あり

藤田湘子

酒の肴に沢庵をぼりぼり食べている中年の獵師の姿が浮かぶ。獵の後の歓談の一コマか。「漆黒の急階段や狩の宿」「狩の犬坐しもいろの舌を出す」「革袋して獵銃の重さ増す」「獵銃を持たせてもらひすぐ返す」などの句が近辺にあるので、吟行に行つたものか。最後の獵銃の句はよく取り上げられる句である。しかし、私はこの沢庵の句の方が好きだ。湘子は山の生活者を如実に見せて、同じ世代の獵師の沢庵好きに共感しているのである。

『二個』所収。昭和五十八年五十七歳の作。